

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第38号 : 特集・古城址一覽(Ⅲ)
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 38 p.1-p.6
Issue Date	1990-06-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78848
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

新疆維吾爾自治区古代城址一覧表(Ⅲ)

— 黄文弼氏の調査報告を中心にして —

荒川正晴 編

【南疆——亀茲(クチャ)地域(Ⅰ)(Ⅱ)の付図】

【はじめに】

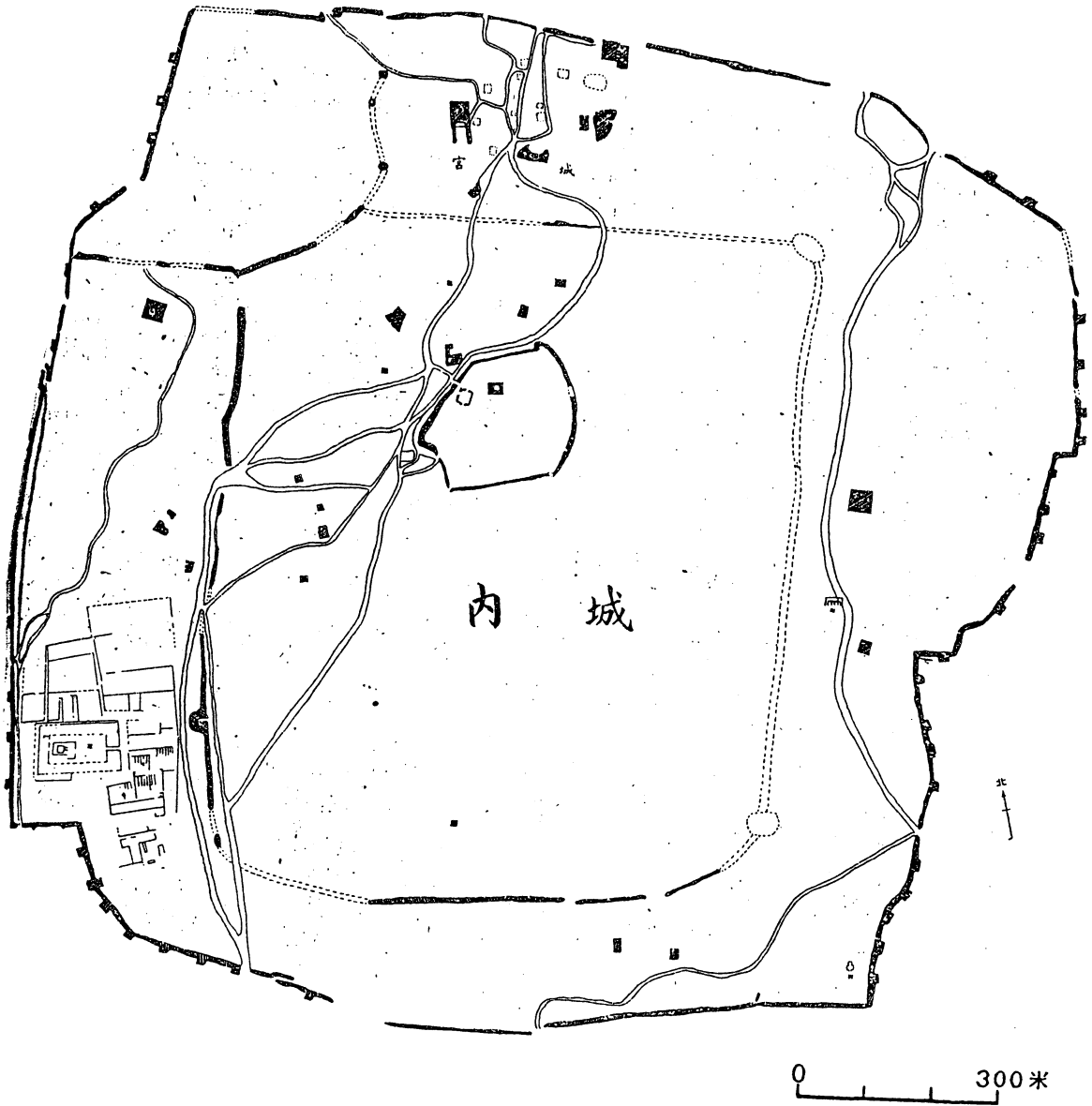
先に本誌第26号¹⁾と第27号に掲載した本一覧表(Ⅰ)・(Ⅱ)において、亀茲(クチャ)地域を対象にして、当地に点在する古代城址に関する情報を整理したが、副題にも掲げたように、今回は主として黄文弼氏が、1928～29年と1957～58年とに調査された際の報告書(① 黄文弼『塔里木盆地考古記』科学出版社、1958年。② 同『新疆考古発掘報告(1957-1958)』文物出版社、1983年)に依拠して作成を試みた。こうした表を作るのは、ひとつには、高昌故城や交河故城といったトウルファンに数多く点在する古城址が、その他の新疆維吾爾自治区に散在する同時代のそれとどのような点において異同が認められるのかという関心に基づいている。そうした作業を具体的に進めるためには、各オアシス地域の古城址との個別的な比較検討が不可欠であろうが、取りあえず本表では、亀茲周辺の諸城址の規模と形状に関する情報を中心に整理した。続くその他の地域を対象にした一覧表も、同様な形式で作成する予定である。

当然こうした一覧表であれば、どうしても各古城址のプランは欠くことのできないものと思われるので、本号に先の表(Ⅰ)・(Ⅱ)に掲げた亀茲地域のいくつかの城址の図版を掲載することにした。また同時に、トウルファン地域の主要な故城址のプランを併載し、両地域の故城址相互の比較検討に資することにした。引用に当たっては、先に述べた黄文弼氏の報告書①に載せられている城址の図版を多く転載した(典拠は、各図版の下に明記する)が、この点については令息の黄烈先生に手紙で了解を求め掲載の許可を得た。図版の転載を快く承諾された先生には、深く謝意を表する次第である。なお、城址規模の比較を容易にするため、すべて縮尺を同一(一万分の一、1cm=100m)にして引用することとする。

【註】

- 1) 第26号の1頁の注12)において、高昌城の外・内城の問題に触れ、「白須淨眞氏は、現地調査を踏まえ、麴氏高昌国時代に既に外城が存在していたと推定されている。」と記したが、この部分についてはすべて削除する。詳しくはこれから発表される白須氏の専論に譲るが、西州時代に見られるような外城が、すでに麴氏高昌国時代に存在したと氏が考えていたのは、明らかに筆者の誤解であった。ここに訂正させて頂く。

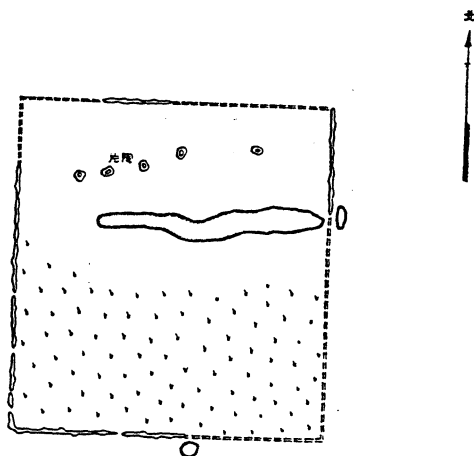
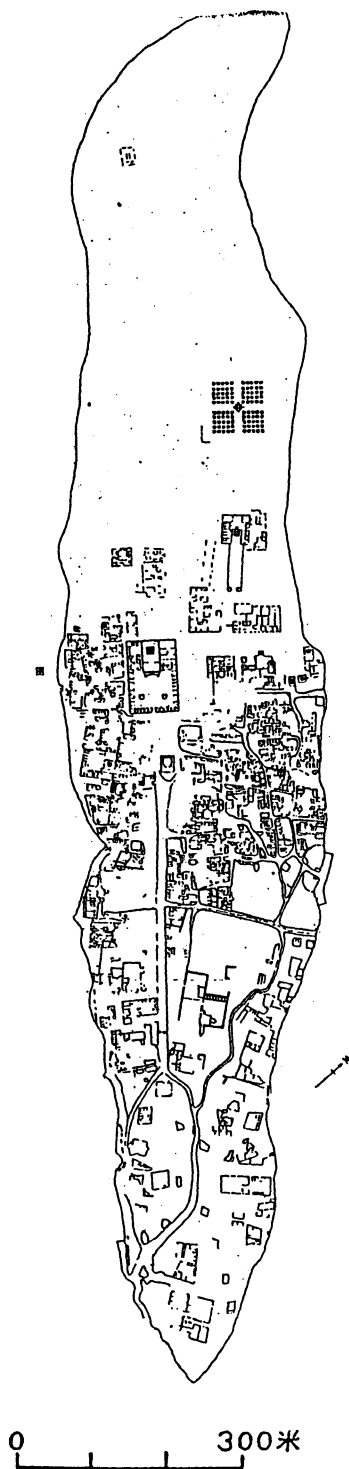
【付図】 (トウルファン地域)



高昌故城 (Qara-khōja)

閻文儒「吐魯番の高昌故城」『文物』1962年第7・8期、p. 29(『三十年』 p. 137)、
図1「高昌故城平面図」

※ A. Stein, Innermost Asia, vol. 3, London, 1928. (Rep. New delhi, 1981)
の“Sketch plan of ruined town of Idikūt-shahri Kara-khōja”参照。

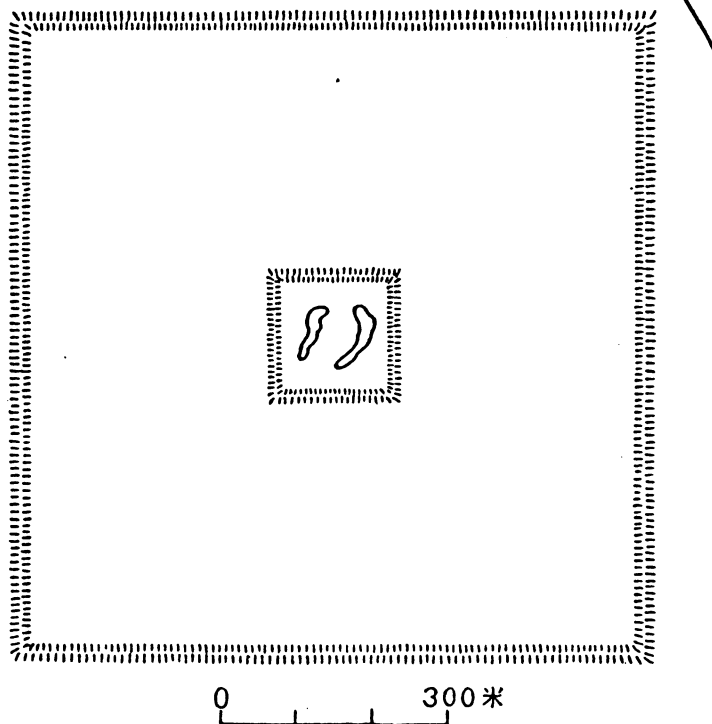


南平（讓布工商, Lampu）古城
 黃文弼『吐魯番考古記』（中国科学院、
 1954年）「付図三」。

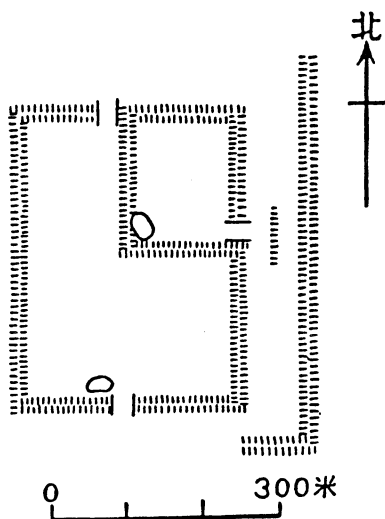
交河故城（Yār-khoto）
 觀民「交河城調查記」（『考古』1959年第5期）「付図」
 ※黃文弼『吐魯番考古記』（中国科学院、1954年）「付図二」参照。

(クチャ地域)

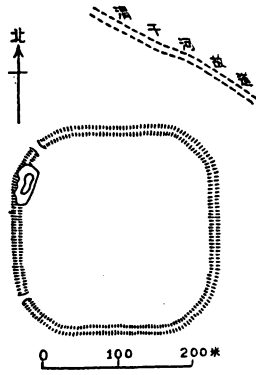
『考古記』付図11-13。



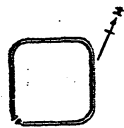
(17) 羊達克沁
(Yantak)



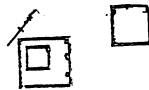
(15) 玉爾滾沁
(Yulghun-shahr)



(23) 窮沁
(Chong-shahr)



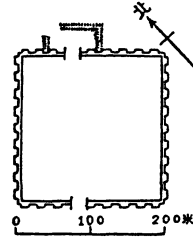
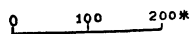
(30) 小黑太沁 (漢人城, Kitai-shahr)



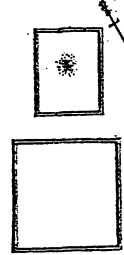
(8) 色當沁旧城
(Sang-tam?)



(9) 勒哈米沁



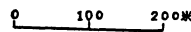
(12) 通古斯巴什 (Tonguz-bāsh)



(6) 克子爾沁
(Kizil-shahr)



(20) 月勒克沁



【A. Stein., Innermost Asia, vol. 3, London, 1928. (Rep. New delhi, 1981)に「Kizil-shahr」「Tonguz-bāsh」「Ak-shahr」「Khitai-shahr」「Chong-shahr」の Sketch planが付されているが、ここでは省略に従う。】

【略称】

『考古記』……黄文弼『塔里木盆地考古記』科学出版社、1958年。

『三十年』……新疆社会科学院考古研究所編『新疆考古三十年』新疆人民出版社、1983年。

覚 書：上海図書館所蔵、妙法蓮華經題記の紀年について

近年、中国の国内各地に所蔵されている敦煌遺書の目録類が公刊されているが、そのうちのひとつ、呉織・胡群耘編「上海図書館所蔵敦煌遺書目録—附伝世本写経及日本古写本—」（『敦煌研究』1986年第2, 3期）が紹介する上海図書館所蔵の經典のなかに、以下のような題記を有する妙法蓮華經(No.812399<録>同正、98頁)がある。

義和五年戊寅歲十月十一日、清信女夫人和氏伯姬、稽首歸命」常住三寶、聞一諦幽昧顯自九經之文、三空淵旨彰於十二之說。」弟子仰維斯趣、敬寫法華經一部。
(下略)

解説はこの冒頭にある義和を北凉の沮渠蒙遜の元号と断じ、併記されている戊寅という干支から、西暦の四三八年に比定した上で、正しくは義和八年であるとする。たしかに沮渠蒙遜は四三一年六月に承玄から義和と改元しており、しかも戊寅に相当するのは四三八年であるから、その限りにおいては、解説の主張もわからぬではない。しかし八年を五年と書き誤るのは通常では考えられないことだし、なによりも沮渠蒙遜は四三三（義和三年）年に逝去して、王位を継いだその子牧犍は直ちに承和と改元しており、四三八年は承和六年となる。これは編纂史料の説くところであるが、さらに近年、吐魯番出土文書に対する分析の結果、実は四三七年に承和から建平への改元が行なわれたことが明らかになった。この立場に立てば、四三八年は北凉では建平二年だったことになる（ただし高昌郡のみは、縁禾七年が用いられていたと思われる）。

要するに編纂史料からも、出土文物からも、四三八年が義和八年だったことは主張できないのである。書写に従事した人間がこのような改元の事実を承知していなかったような場合のみ、義和八年と記すこともあったろうが、ここでは義和五年となっているのである。しかも五世紀前半の文字資料で、「元号（年）＋干支（歳）」という形式によって紀年を表記した事例は皆無といってよい。そもそもかかる紀年表記の様式は、中国本土ではほとんど行なわれておらず、わずかに吐魯番において、しかも麴氏高昌国時代になってからようやく定着したものなのである。したがって義和という元号も高昌国のそれと考えるべきであろう。

幸いにも高昌国の義和五年は六一八年、すなわち戊寅歳であり、元号と干支と西暦が見事に一致する。供養者の和氏も、高昌国時代、有力な一族として出土文物にしばしば登場しており、問題はない。しかも、以上のような考えが正しいとすれば、いわゆる義和の政変当時の写経題記ということになり、今後願文本文についても、かかる観点から検討を深めてゆく価値と必要がある。

残念ながら、高昌国において書写された妙法蓮華經がなぜ敦煌の莫高窟から出土したのか、という問題が残ってしまうが、類例が全くないというわけではないので（例えば、B.L.S.2838など）、とくに矛盾とするには及ばないと思う。（關尾史郎）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)